

No.

拝啓 October 14, 1937. 御差出の御懇心書十月七日着難有
拝見仕候。毎度ながら Rev. S. Shimizu 様に翻訳を煩は志御氣の
毒に存じ候。

一 私事無事御安心下され度候。乍去視力も次第に弱く脚力も衰へ老
年の味をおす。感じ居り候。学科の研究など思ひもよらず候。

二 喜沢君の学校時代 *Mitsuhirou* を御坐候事は有名なものを候。
級主任の私も学校長すらも持て餘まり居り候程を候。乍去其の不屈
不撓の氣力こそ他日大成効を為したるものと存せらる候。

三 御結婚生活二十一年間の回顧録を御編輯拵にさし御完結の上は
御印刷被成候御企劃の由誠に敬服感歎致候。中々男子も及ばざ
る御熱誠の程感に不堪候。喜沢君も彼の世を何程か喜んで居らる
事と存候。喜沢君は晩年文學に親まれ候やう存じ候。

① George 君廿一歳になられ候由何程か立派な好青年とならま候

No.

法事と審せらる候。来年は無^レシテキウス大寺御九十業の志願定^レの由
誠には樂^レしむの法事と存上^レ候。

五. 御許様よりは是迄の至極良^クな家庭より御手傳ひ被^レ遣、は令息様
の法卒業を御待^テり被^レ遣候由何卒御自^レしを祈上^レ候。

六. 若生氏と私とに先便^テ書^レ出^レ候^レ書^レの略歴一部宛^テ法惠送^レ被^レ下

競^テ存^レ候。略歴は御許様送^レ附、更^ニ歴^ト依^リて記^サれ^ルし^テ、内

一層^ウ水^クく揮^テ羨^テ傳^テ妻^ハ惣次郎氏へし一部との御話より知^ル同氏

は土月十日^ニ日中風^ヲ病^ミ逝^キ去^ラせられ候。妻^ハ浪^ノ君と彼の世を御面^会

た^ラせ^テ斗^ハ小事と存^レ候。

右惣次郎氏の姉(妻^ハ浪^ノ君の叔母)の方と姉^妹三人未^ダ健^在な^レれ^トも

英^語の知識なき^ニ為^メ自然^ニ手^紙を差^上げ^テね^テ御^無音^致候^事と

存^レ候。

七. 遠^藤武^夫君^ハ江^波家⁽醫^者)^の娘^をし^らひ^テ妻^とな^し目^下

東京市に新家庭を持ち自分も醫者として其の病院に勤め居る由ゆき及び信、其の中私より武夫君に手紙をやり武夫君より近況を直接御報させ可申信、

八、秋の景色の春、夏のものよりも御心は適一たる御詠を承り、少くも感じ入り信、若い時は春の景色が心に適し、老年は近くは後ひて流ちつゝある秋の景色が筆を念ふのが低らく多岐の人の情かもし存せらるゝが如何なるや

九、法蓮事延引は悔密致さる、向寒の節何卒は自然と致さ、致さ

一九三七年 十二月十日

岡根仁三郎

新田アグネス様